
インスタント・メシア奮闘記

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インスタント・メシア奮闘記

【Nコード】

N6778Y

【作者名】

さや

【あらすじ】

魔獣王退治のため異世界に召喚されてしまった井上拓斗。

しかし、彼がこの地の神より授けられたのは、とても役に立つとは思えないトンデモ能力だった。

異界の救世主^{メシア}井上によるインスタント麵最強伝説が今ここに幕を開けるッ！

前編

……あれはそう。

大学を卒業して、もうすぐ社会人かと胸を躍らせていた三月末日の事。

何の前触れも無く、唐突にその不可思議な現象は起こった。

久しぶりに食べたくなったキッチンラーメンを煮えたぎる鍋にぶち込み、三分。仕上げにごま油を一滴垂らして「さあ食べよう」と思った瞬間、辺り一面真っ白い光に包まれ……。

気が付いたら見た事も無い大広間の中心で、大勢の人間に囲まれていた。

えんじ色のジャージ姿でマイ箸を持ったまま呆然とする俺。

額に冷や汗をかきながら視線だけで周囲を軽く観察して、意識が飛びそうになった。

等間隔に立てられている白い柱には蝶に似た細かな紋様がいくつも刻まれ、床にはこれまた細かな刺繍が施されたサフラン色の絨毯が敷き詰められている。壁はあまり無く、ほとんどが吹き抜けの状態だ。

雰囲気はアラブだとかインドだとかそっち方面の印象が強く、城というよりも宮殿に近いように感じる。

しかし、外に見えるのは砂漠では無く、鬱蒼とした木々が地平線まで覆い尽くすアマゾンの様な光景だった。

次いで、俺を取り囲む人々を怖々見やれば、肌の色から毛の色からとにかくカラフルで非情に目に痛い。色素細胞はどうなっている

んだろうか。

……異世界。そんな言葉が頭に浮かんだ。

一瞬にして絶望へと思考が引きずられそうになった時、それまで黙りこくっていた人間たちの内一人が話しかけて来た。

「まずは、ようこそ。神ラームに導かれし異界の救世主よ。」

某赤い配管工のような形の蛍光紫の髭を持ったオッサンが一步前へ踏み出して来る。

俺には出せない上司オーラを全身に纏わせているオッサンは歓迎の言葉を述べながらも無表情で、その瞳の底の見えない冷たさにゾツとした。

「我々は貴方を歓迎しよう。」

淡々と言って、動作だけは恭しく頭を下げるオッサン。それに追従するように広間の人間全員が揃って俺に向かい礼の形を取る。

酷く……嫌な予感がした……………。

~~~~~

やはり、状況は最悪だった。

あれから聞いた話によると、俺はなんと魔獣王とやらを倒す救世主としてこの世界に呼ばれてしまったらしい。

伝承によれば異世界の人間は界を渡る際、神ラアムの祝福により一つだけ特殊能力を授けられるとかで、それを期待しての召喚だったのだそうだ。

この世の全てを滅ぼす力を持つという魔獣王を倒せば契約が終了し、自動的に元の世界に帰る事が出来るとは言われたが……はたしてこの話どこまで信用して良いものやら。

何にせよ、この宮殿に長く留まるべきでないのは確かだろう。だが、彼らの話が嘘でどう足掻いても地球への帰還が望めない状態であるのだとすれば、どうしようもなく鬱だ。

ちなみに今は、ラアムの巫女とか言うチマチョゴリのような服を着た婆さんに、俺がどんな能力を持っているのか鑑定してもらっているところだったりする。

大まかな説明が終わると、俺はオッサンに案内され広間から神を祭る神殿の一室へと移動させられた。

豪華なクッションに胡坐をかいた状態で巫女の婆さんと向かい合わせに座っている。

先ほどと違い、この場所には片手で足りる程度の人数しか残っていない。高位の人間しか入れない部屋らしい。

「分かったぞい！」

唐突に叫びながら、グワツと目を見開く婆さん。とりあえず、唾を飛ばすのは止めてくれ。

当の本人に両手を取られているから、逃げられないし防げないし

拭えない。最悪だ。

「彼の知っている限り全ての種類のインスタント麺を、いつでも好きな時に好きなだけ好きな状態で出現させる事が出来る力ッ！

それが神より賜りし救世主様の能りよふひゃっ！」

勢い余って途中で入れ歯がブツ飛んだが、誰も気にした様子は無い。

みんな、婆さんの言葉が理解できずに困惑しているようだ。

かく言う俺もショックで動けずにいる。理解出来ない、したくない。

そんな「さあ死ね」と言わんばかりの意味不明能力で魔獣王とやらを倒しに行くなんて、ありえない。

自分の世界のメシが食えるのは万歳だけど、それと引き換えに命を差し出す程バカじゃないぞ俺は。

大体、旅が始まる前から詰んでるってどういう事だよ。

ラムとかって神は何を考えてるんだ。意地が悪いのか。苦しむ俺を見て楽しんでいやがるのか、チクショウ。

~~~~~

こんな能力で戦う事は出来ないという俺の訴えを完全に無視して、奴らは「神に選ばれし救世主様なら不可能も可能に変えられます。我々は信じています」だとか何とかおためごかしを言いつつ、屈強

な兵士を使い宮殿の外へと強引に放り出した。厄介払いが見え見えで反吐が出る。

一応、形ばかりといった具合にマントと短剣、簡単な世界地図に出国許可証だけは貰えたが、これでは死ねと言われているも同義だろう。

城門の前で途方に暮れつつ、これからどうするかを考える。

とりあえず、日本に帰る事を諦めたくは無い。

だとすれば、無謀を覚悟で魔獣王とやらを倒しに行くか、他の帰還方法を探すためあての無い旅に出るか……。

しかし、俺には路銀も常識も体力もない。この世界では、生れたての赤ん坊のように無力な存在だ。

ただ生き抜くことすらも難しいこの状況で旅立つなど、自殺行為にも等しい。

インスタント麺が出せるという事で飢え死にだけはしないだろうが……それだけだ。

人は食べ物だけで生きているわけじゃあ無い。

悶々としつつ町を彷徨さまよっていると、人通りが多い事もあり誰かと肩がぶつかってしまった。

咄嗟に謝ろうと顔を上げれば、そこには緑色の無精髭を生やしたドブ色の肌の小汚いオッサン。

ポニーテールという名の髪型に俺がこれほど嫌悪感を覚えたのは初めてだ。

服装や目つき、纏う雰囲気など彼の全てが悪い性質を持った人間だという事を示唆している。

危険を避けるため素早く「申し訳ありませんでした」と謝り立ち去ろうと足を踏み出せば、当然のようにオッサンは俺の肩を掴んで

来た。

……どこのお約束展開だ。というか、痛い痛い肩痛い外れる痛い力入れ過ぎだろオッサン！

思わず顔を顰める俺に向かい、オッサンは下卑た笑いを浮かべて臭い息を吐き出す。

「んなチョロいワビだけで済むんなら、保安部隊はいらねえってなあ。坊主。

つつーワケで、ちよいとアッチで話でもしようじゃねえの。」

指された先を見れば、昼間だと言うのに薄暗く陰気な空気を醸し出している細い路地が目に入る。

その先で起こる事を想像し恐怖心から必死に抵抗するも、筋肉質で身長の高いオッサンの手は外れてくれない。

自分で出来ないのならと助けを求めるように周囲に視線をやってみたが、厄介事はごめんだとばかりに顔を逸らされてしまう。

結局、俺は大通りから外れた路地の奥へと無理やり連れて行かれてしまった。

逃げ道を塞ぐように壁際に追い詰められて、自らの不甲斐なさに涙が出そうになる。

……痛めつけられるのも、数少ない荷物を盗られるのも、殺されるのも、菊を散らされるのも全部嫌だ。絶対に嫌だっ。ラムとか言う神のバカ野郎！チクショウ！

本当に泣き出してしまわないよう奥歯を強く噛みしめ、ねめつけるようなオッサンの鋭い眼光に根性で耐える。

「坊主よお。テメエがぶつかって来たせいで、俺の利き腕がイカレちまったんだわ。」

これじゃあ、まともに金が稼げなくて明日にでも飢え死にしちゃうかもしれない。……で、だ。

まさか坊主は人にこんな酷い怪我を負わせといて、無責任にもトンズラしようってえ人でなしじゃあねえよなあ？」

先程まで余裕で動いていた右腕をダラリと下げて、オッサンは恥ずかしげも無くこう言い放った。

イチャモンの付け方というのは、どこの世界でも似通っているらしい。こういう事をする奴というのは、えてして思考回路が単純なんだろう。芸が無い。

さすがに慰謝料制度は無いように持って行き方は違ったが、最終的な要求内容も同じ。ただ、『金』^{カネ}だ。

是も否も言わずに黙りこむ俺に痺れを切らしたのか、オッサンは予告もなしにその太く硬い膝で俺の腹部を思い切り蹴りつけて来る。鈍い音と共に石壁に背中がめり込んで、意図せず呻き声が漏れた。これ以上ないという激痛に堪らず蹲ろうとするが、その行動はゴツイ左手に首を掴まれる事によって強制的に中断させられてしまう。脅すためなのか、もういっそ殺してしまおうとも思っているのか、ギリギリと指に力を入れられて呼吸がままならない。細まった気管から短く音が洩れ出ている。

苦しい苦しい痛い苦しい痛い苦しい……。

朦朧^{もうろう}としてくる意識の中、元の世界に残してきた家族の姿が浮かんでは消えを繰り返していた。

っこんな…、こんな訳の分からない世界で、誰一人俺を知る人間のいない孤独な場所で…、こんなにも簡単に、あっさり、呆気無く、俺は死んでしまうのか…？

まだ何もかもがこれからだった。これからようやく俺自身の生れた意味を…人生を紡いでいくはずだったのに。

…父さん…母さん。それから兄ちゃんにピーちゃん…。ごめん…俺…。

諦めと悔しさと寂しさと惨めさと…その他様々な感情が絢^{ひとしずく}い交ぜになって、我慢していた涙が一滴頬を伝った。

その時だ。路地の奥から比較的若い男のものと思わしき声が響いてきた。

「デメエも懲りねえなあ……。

クズがッ。次、見つけたらタダじゃおかねえつつたろーがよ！」

男の怒鳴り声に反応したオッサンがビクリと身体を硬直させ、俺の喉にかけられていた手が緩む。

そして、次の瞬間……。オッサンは華麗に宙を舞っていた。

~~~~~

突然現れた男に殴る蹴るなどの一方的な暴行を受けたオッサンは今現在、俺から数メートル先の地に伏したままピクリとも動かない。死んでいるのか気絶しているのか分からないが、とにかく脅威は去った。

地面に力無く座り込んだまま、自らの気を落ち着けるように深呼吸する。

こーほー、こーほー。…って、某機械の超人か俺は。

自然と頭に浮かんだしょーもない冗談に自分でツツコミを入れて、はたと気付く。

……ああ、そう…か。助かった…俺は助かったんだ。  
改めてそう認識した途端、顔面がボツと真っ赤に染まった。

つううわああああ、何つつー恥ずかしい事を考えてたんだ、さっきの俺！

怖えーっ。死の間際の思考マジ怖えーっ！ひーっ！

羞恥に転げ回りたいのを我慢して自身の身体をギュウギュウに抱え込んでいると、オッサンを退治してくれた男が正面にしゃがんで話しかけて来た。

「大丈夫か、兄ちゃん。なんつーか…災難だったなあ。

ま、ちったあ良い教訓になったろ？

いくら治安が良いと言われてる帝都でも氣い抜くもんじゃないってな。」

「あ…の、えっと、はい。ありがとうございま…す？」

三十歳前後に見える焦げ茶の肌の男は、キツイ印象のつり上がった目つきをしていたし、真っ赤な髪を威嚇するようにギンギンに立

ててはいたけれど、どこか人を安心させるような不思議な空気を纏っていた。

こちらの身体の無事を確認すると、彼は「よしっ、んじやもういいな」と満足そうに言って立ち上がり、何事も無かったかのように立ち去ろうとする。

慌てて俺が言葉だけでなく何か礼は出来ないかと尋ねると、彼は人懐こい笑顔で「かかつ、いらねえよ。律儀な兄ちゃんだな」などと特徴的な笑い声を上げながら肩を叩いて来た。

それから男はあっさりと踵を返し、動かないオッサンの首根っこを掴んで片手にズルズルと引きずりながら去って行った。

これが後の用心棒、もとい俺の唯一無二の仲間となる男との初めての出会いになるのだが……。

この時はただ「親切な人間もちゃんというんだな」と異世界に対する認識を少し改めただけで終わったのだった。

## 中編

あ…ありのまま今までに起こった事を話すぜ。

俺は日が暮れるまでに三度ほど柄の悪い男に絡まれてしまったと思ったら、毎回のように例の赤毛の男に助けられていた。

な…何を言っているのか分からねーと思うが、俺も何が起こっているのか分からなかった…。頭がどうにかなりそうだった。

ご都合主義だとかヒロイン体質だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

「兄ちゃんよお…。」

「申し開きもごさいません…。」

救出後、呆れた目で見られる俺。…うん。非情にいたたまれない。男が去ってから、とりあえず常識を学ぼうと人通りの多い場所では人間観察をしていたら絡まれ、何とかお金を稼げないかと露天が並ぶ通りを歩き回れば絡まれ、どうにもお腹が減ったので広場の木の下でコソコソとカップラーメンを啜っていたら絡まれた。

そんなにカモオーラでも出ているのだろうか。日本では一度だつて無かったのに…。

何気にショックを受けて俯いていると、あえて空気を読まないのか赤毛の男が鼻をスンスンと鳴らしながら話しかけて来た。

「…：…なあ、何かこの辺やたら美味そうな匂いがしねえか？」

「えっ、美味しそうな匂い…ですか？」

いや…特に何も…：つて、ああ。多分、俺が食べていたコレの匂いでしよう。」

絡まれた際、咄嗟に木の後ろに避けておいた食べかけのカップ麺をそつと両手で持ち上げる。

それを視界に収めた男が、まるで少年のごとき素直な反応を見せた。

「あつ、ソレだ！すげえ、良い匂い！」

~~~~~

結局、あまりにキラキラしい瞳で見続けられて、食べかけラーメンを差し出すと共に能力の事をバラしてしまった。

一応命の恩人であるし、何度も絡まれる俺を呆れながらも助けしてくれる程度には善人みたいだから悪い様にはならないと信じた。

今は彼の泊っている宿の一室で、ひたすら色んな種類のインスタント麺を出し続けている。

「うつま！何だこりや、メチャクチャ美味いじゃねえか何だこりや！うおつ、こっちも最高にうめえ！ていうか、全部うめえ！」

この能力で夕食を提供すれば、代わりに部屋に泊めてくれると言
うのでホイホイついて来た。

最初はそれこそ本当にそれだけでいいのか、何か騙されていない
のか、ノンケだって構わず喰っちゃまうような人間なんじゃないのか
等色々と不安もあったが、目の前で大量に消費されていくインスタ
ント麺たちを見て、これなら確かに浮いた食費と宿代がつり合っ
てもおかしくないと納得した。

自分の手柄では無いにしろ、こちらの世界の食べ物やベタ褒めさ
れるのも悪くない気分だ。

それでも、もし後ろの穴が狙われたら全力で逃げ出すつもりで一
応の警戒はしているが……。

食べるだけ食べてようやく人心地ついたのか、先ほど広場でチャ
パムと名乗った男はベッドの上で大の字になって腹を擦っている。

その顔はいたく幸せそうだ。

ちなみに、食べた後の空いた容器や袋などは消せる事が分かっ
ている。

最初に広場で食べ終わった時に、土に還らないであろうソレをど
うしようかと悩みに悩んだ。そして「いっそ消えてくれればいいの
に」と頭の中で考えた瞬間、本当に容器がいずこかへと消え去った
のである。

さておき。彼に頼みごとをするのなら、とても気分が良さそうな
今において他に無いだろう。

「あの…、チャパムさん。」

「さんとかいらねえって。で、どうした拓斗？」

「俺にはインスタント麺を出す事くらいしか出来ませんが…、それ
で良ければお願いがあるんです。」

そう言った途端、チャパムはスツと上半身を起こして真剣な顔つきで俺を見て来た。

思わず怯みそうになるが、勇気を奮い立たせ視線を逸らさずに見つめ返す。

別段、睨まれているとかそういう事実は無いのだが、陽気な雰囲気から一転した彼の真面目な表情には何とも鋭い迫力があつた。

だからと言って、俯くわけにはいかない。無茶な願いを聞いてもらおうとしているのに、相手の顔すら見られないようじゃあいけない。

しばらく沈黙が続いたが、先にそれを破ったのはチャパムだった。

「拓斗よお。そりゃあ、俺が誰だか知った上で依頼がしてえつつてんのか？」

「名前ならさっき聞きました。」

特におかしな事を言った覚えは無いのだが、なぜかチャパムはその返答を聞いた後、深く息を吐きながらがっくりと肩を落として額に手を置いた。

「いや、そうじゃねーっつの。流れ読もうや。

…って。まさかとは思うがお前、俺の仕事が何だか知らなかったりすんのか？」

「初対面の人間の職業を知っていたら逆に怖いですよ。」

何が言いたいのかよく分からず眉間に皺を寄せれば、信じられないと言った表情で口を開くチャパム。

「バカなっ。始末屋チャパムつつたら大陸裏の島国だって通用するんだぞ!？」

その反応でなんとなく理解した。

なるほど、要は彼は始末屋という仕事をしている有名人らしい。言い方から察するに、こちらの世界のハリウッドスターかそれ以上の知名度があるのかもしれない。それなら驚くのも無理はない。ところで…。

「始末屋……って、何です？」

「おまっ、どんな未開の地に住んでたらそんな事も知らずに生きてられんだよ!」

「えーと、……………別世界？」

「はああ!？」

実は彼に元の世界に帰る手段と一緒に探して貰いたいと考えていた俺は、それからあっさりここに至るまでの真実を告げた。

相手に信用して欲しいと思ったのなら、まず自分から相手を信じなければ…。とか言いつつ、ただ愚痴りたいだけだったかのような気もするがそこはそれ。

説明が終わった後で冷静になったチャパムに聞いたところ、始末

屋というのは魔獣始末人の略称で、魔獣と呼ばれる生き物を殺して生計を立てている人間をそう呼ぶらしい。

魔獣というのは、十年程前に発生した悪魔岩の悲劇と呼ばれる現象の後から現れ始めた人を喰らう化け物の事なんだとか。

さらに、魔獣には理性が無く、己以外の全ての生ある存在へと襲い掛かる程獰猛な性質をしており、形は人型だったり獣型だったり様々だが、焼けただれた様な皮膚と突出した身体能力があるため、簡単にそうだと判断がつくとの事。

この世界の人間は悪魔の悪戯だとか神の怒りだとか適当な理由を付けているようだが、個人的な意見としては、隕石が降って来てそれに付随していた未知の放射能的な何かに汚染され生態系が狂ったのではないかと思っている。

実は落ちたのは宇宙船で人型の魔獣は宇宙人、獣型の魔獣はそのペットという線もあるかもしれない：が、まあこの推測は単なる俺の趣味だ。当たっている可能性は限りなく低いだろう。

宇宙の概念が無さそうな相手に話したところで理解が得られるとは思えないし、適当な憶測を語るのも憚られたので口には出さなかった。べっ、別に説明が面倒臭かったってんじゃないんだからねっ。

そうそう。チャパムはこちらが呆気に取られてしまうほど簡単に旅の同行を了承した。

あんな美味いモンが毎日腹いっぱい食べられるなら護衛でも魔獣王退治でもドンと来い、だそうだ。

それさえ叶えていれば、彼は旅にかかる費用を全額負担してくれるらしい。

そのかわり道中の魔獣退治の報酬などは全てチャパムの懐にという事らしいが、現状俺がお荷物でしかない以上、何のメリットにも

なっていない気がする。

どうしようもない疑心暗鬼にとりつかれながら、詳しい話は明日だというチャパムの言葉に促されて、俺は大人しく床に就いたのだった。

~~~~~

一夜明けて次の日。

朝の内にある程度の装備を整えた俺とチャパムは、王都を出て獣道のような街道を歩いていた。

ここは、最初に召喚された宮殿から見えた不気味な木々に被われた森の中だ。

町や村以外の人の住まぬ場所はどこもこんな感じらしい。現代人にはキツイ事実だ。

チャパムは俺の何倍もの荷物を抱えつつも、平然と話をしながら歩いている。

「おそらく拓斗が元の世界へ帰る方法は、神官どもの言葉通り魔獣王を倒すことで間違いねえだろう。

召喚ってのはそういうもんだと聞してる。

だが、間違ってもお前の能力で魔獣王を倒せる事はないと思った方がいい。」

「……ですよね。」

俺はチャパムの言葉に乾いた笑いを返した。やはり、帰還は諦めるしかないのだろうか…。

だが、それならどうしてチャパムは俺と旅をしようと思ったのだろうか？

彼になら魔獣王が倒せると、そういう事なのか？

けれど、再び口を開いたチャパムはそんな考えを否定するかのような情報を与えて来た。

「俺もまだ噂でしか聞いた事は無いが…。

魔獣王ってのは蜘蛛のような見た目をしていて、しかも、ただの魔獣と違って理性的で狡猾なんだそうだ。

そして、身の丈は驚異の八ガリブ…って分かんねえか。えーと、お前の十倍くらいの大きさだ。」

「俺の十倍のサイズの蜘蛛とか想像だけでチビりそうなんですけど。」

「まだだ。さらに、口からは強力な毒液を吐き出し当たれば即死。ケツからは随時魔獣が生み出され続けているらしい。」

なんだそのゲームのボスモンスターみたいな設定！

リアルってだけでマジ鬼モードだよ！

そして、宇宙人とそのペット説は消えてしまった。残念だ。

「それって人が生身で勝てる相手じゃなくないですか。」

「だから、ワザワザ他の世界なんてイカレた場所から拓斗が召喚されたんだろう。」

まあ、当ては見事に外れちゃったようだがな。」

「ああ…、そうでした。」

何だか唐突に崖の上から突き落とされたような気分だ。  
こちらの落ち込みを察してか、それからしばらくチャパムが声をかけてくる事は無かった。

~~~~~

その夜。街道を旅する者のために一定区間ごとに作られている簡素な小屋の中で二人、静かに腰を下ろしていた。

ふと、荷物の整理をしていたチャパムが話しかけて来る。

「なあ、拓斗よ。役に立たねえと嘆く前に、まずはテメエの力つてヤツをきちんと把握する必要があるんじゃないか。

色々やってる内に、魔獣戦で使える方法ってのも考え付くかもしれないねえしな。」

「……そうですね。」

心の中で「気休めありがとうございます」と捻くれた気持ちで返答しながら、能力把握自体は確かにしておくべきかと寝るまでに色々と実験してみた。

結果。

カップに袋にトレイ。オーソドックスなうどんやラーメン、他にもそば、スパゲッティ、焼ソバ、以前母がダイエットで食べている

のを見た春雨スープにソーメンスープといったものまで、インスタント麺に分類されるものであれば種類は本当に何でも有りのようだ。ただし、袋ものは完成品を出そうとすると袋無しで麺とスープが地面にダイビングしてしまうので自前の容器が必要になる。

また、かやくやスープや麺が単品で出て来る事はない。

開封前のものから完成後のものまで好きな状態で出すことが出来、また、嗜好に合わせて麺固めや逆に伸びきった状態のものなども出せるらしい。

怖ろしい事に、特に体力だとか精神力だとかその他物質的な何かだとか、とにかく引換に何かを失うといった事実は無く、望めば望むだけ、それこそ無制限に能力を使い続けられるようだった。

ああ、後。見える範囲であれば、どこにでも出現させることが出来る。これが分かったのは僥倖だった。

例えば、敵と正面から睨み合っている時に背後で音を鳴らし相手の気を逸らしたり、例えば、自分は安全な場所に隠れたまま魔獣を誘き出せたりするだろう。

能力の把握を提案してくれたチャパムに感謝だ。

~~~~~

旅を始めて最初の頃は何かもかがチャパム任せだったが、彼は段々と俺にも仕事を与えて来るようになった。

いつまでもおんぶに抱っここの状態じゃあ心苦しいし、出来る事が増えるのは楽しかったから、俺はそれを率先して引き受けていた。

彼は俺の実の兄と違って、とても面倒見の良い男のようだ。爪の垢を煎じて飲ませてやりたい。

ある日、腰から下げているだけだった俺の短剣を見ながらチャパムが言った。

「さて、そろそろその短剣くらいは最低限扱えるようになっておいた方がいいぞ。

もうちょい先の話になるが、国境を越えると魔獣の出現率がグンと上がるからな。

まあ、ちょいとばかり扱いを覚えた程度で奢って自ら死に向かうようになりゃ世話あ無いが…。

いつでも俺が助けてやれるとは限らねえし、せめて時間稼ぎくらいは出来るようになれ。」

これまでも魔獣と遭遇した事はあったし、チャパムが動物を捌くシーンなんかは何度も見たからスプラッタな光景自体には随分と慣れたように思う。とは言え、正直刃物を扱うのは怖かった。

だが、自分の命がかかっている状況で言える我俣では無いだろう。戸惑いながらもしっかりと首を縦に振り、その日から旅の合間に彼との特訓が行われるようになった。

彼の教えはいつでも実戦形式で相手はチャパム自身だったりその辺の獣だったり、彼が弱らせた魔獣だったりと中々にハードだったが、逆にそのおかげで俺も迷うことなく刃を振る事が出来たと思う。

そして、それから二週間。

国境を目の前にしてようやく己の技術に少しばかり自信がついてきた頃に突如それは起こった。

## 後編

「くそつ、一体全体どうなってやがる！  
魔獣をおびき寄せる狂乱丸でも焚いてたのか！？」

チャパムは狼のような魔獣の首を刎ね飛ばしながら叫んだ。  
始末屋として広く名を馳せる彼が、柄にも無く戸惑っているのはワケがある。

国境を越えるため関所へとやって来た俺達を出迎えたのは、警備兵でも役人でも無く十体ほどの魔獣だったのだ。

そもそも、魔獣王の住処から最も遠いとされるこの国で魔獣に出会う確率はまだまだ低く、俺達が今までに出会った回数も片手で数えられる程度でしかなかった。

しかも、厄介で有名な魔獣王の住処付近でしか見られないらしい人型の魔獣が三体もいたとすれば、彼のその反応も当然である。

特に今は素人に毛が生えた程度の実力しかない俺と言う名のお荷物がいる。その俺を守りながら戦わねばならないのだから、いかにチャパムでも攻めあぐねて無理はない。

人型の魔獣を初めて見た俺は、その見た目のあまりの醜悪さに吐き気を覚えた。

ゾンビゲームの敵をよりリアルに、より怖ろしくしたような姿形。それでいて人を超えた俊敏な動きを見せるのだからたまらない。

場に漂う今にも逃げ出したくなるようなこの腐臭は、おそらく奴らが汚く喰いあさった関所の人間たちの残骸から来るものだろう。



ちなみに俺は現在、関所後方の木の陰からこそこそとチャパムの戦闘を見守っている。

ただ庇われるだけというのはあまりに心苦しく、パツと思ひ浮かんだ熱々汗顔面ぶっかけ作戦などを実行しようとも思っただが、相手の動きが速すぎてインスタント麺の出現させる場所が定まらないという情けなさ。

今の俺に出来る事と言ったら、魔獣の注意を引かないよう息を殺し、あとはせいぜい心の中で彼の応援をする程度だ。

これで仮にも救世主と呼ばれる身だと言うのだから笑わせてくれる。わははのはー、っだ。

「拓斗ッ！」

自嘲しているところに切羽詰まったようなチャパムの呼び声が聞こえて意識を戻すと、豹のような魔獣が一体とハイエナのような魔獣が二体、猛スピードでこちらに向かって来ているのが見えた。

ちよっ、三体、無理、死ぬっ！

頭では逃げなければと思うのに身体が竦み上がって動こうとしてみられない。

獰猛な咆哮と共に、三体それぞれが残り十数メートルの距離を埋めようと跳びかかって来た。

目前に迫った死の恐怖に俺は堪らず叫び声を上げる。

「うばあああああああああッ！」

半ばパニックになりながら両手を前へ突き出すと、ほぼ無意識に能力を発動させていた。

一瞬にして俺の前方に巨大な醤油味の熱湯壁が現れる。もちろん、中には麺やかやくも浮いている。

それは、今の今まで全く考えもしなかったインスタント麺の複数同時召喚だった。

…か、火事場の馬鹿力？

跳躍していたため避けきれず全身にもろに熱湯を浴びてしまった魔獣たちは、俺を捕えること無く地面に落ち火傷の痛みにもがき苦しんだ。

そこへ、なんとか人型の魔獣を振り切って助けに来てくれたチャパムが怯む三体を流れるように切り捨てていく。

魔獣特有の黒い血が飛沫しぶきを上げた。

チャパムは俺の方を見ずにそのまま踵を返しながら、大きな声で言う。

「拓斗っ。今のと同じヤツが出せんなら、あっちにも頼む！」

あっちとは当然、残り六体になった魔獣たちの事だ。

名を呼ばれたことでハッとして、軽く頭を振り思考をクリアにすると、俺は走る彼の背に答えを返した。

「…やってみます！」

さっきのは無我夢中でやった事で意識的に出来るかどうかは分からないけれど、とりあえず試してみても損は無い。

幸い魔獣たちはチャパムへと真っ直ぐに突進して来ているため、そう広範囲に出現させる必要は無さそうだ。

何個分だとか細かく考えずに大まかな幅や高さ等を決め、その範囲内に同種のインスタント麺がギッシリ詰まっている様子を思い浮かべる。

[illegible]

~~~~~

満面の笑みを浮かべたチャパムが剣を鞘に戻しながら傍へと駆け
て来る。

片手を地面について荒く呼吸を繰り返す俺の肩をバシバシと叩きながら彼は興奮気味に贅辞を述べた。

「すつげえじゃねえか、拓斗！見直したぜ！」

「……」

「ん？こゝ何だ？『怖かった』か？」

それとも、もしかして『腰が抜けた』か？」

「こ……攻撃に使用されたインスタント麺は、スタッフが後で美味しくいただきました。」

「……は？」

チャパムにこれ以上ないほど怪訝な目で見られてしまった。くそ、異世界世知辛え。

実際は食べてないし、というかそもそもスタッフとかいないし、別に好きに消せるんだから食べ物や粗末に云々って事にはならないだろうけど、何となく日本人として言うておかねければならない気がしたんだよッ。

暢気に会話をしているところから分かるだろうが、俺の能力は無事に発動し、その隙についてチャパムが魔獣を片付けた。

ようやく緊張から解放された俺は、気が抜けて地面にへたり込んだ…という流れだ。

何はともあれ一件落着。チャパムが伝書鳩的なものを飛ばしていたので、死体の埋葬などは確認に来る保安部隊に任せて大丈夫だろう。

そして、この日以降、俺の役割は大きく変わった。

救世主としては相変わらず論外だが、これがなかなかサポート役として重宝されるようになったのだ。

今回の相手を怯ませる熱湯壁にしてもそうだが、例えば少しだけゆるく戻した焼きそばで吹っ飛ばされた身体を受け止めたり、乾燥麺を重ねに重ねて敵の攻撃を防御したりと優秀な後方支援っぷりを披露している。

そう言えば、ここ数日になって魔獣の数が急激に増加しているという話を国境を越えた先の町で聞いた。

関所の悲劇は『この辺りはまだ安全だ』などと思い込み油断していたがゆえに生まれたのだろう。

前の国では一週間に一度ほどのペースで出現していた魔獣が、日に一度ペースにまで増加していた。

否応なしに戦闘機会が増え、命のやり取りも少なくない中で少しずつ精神力が上がり剣の扱いも上達していく。

さらに、チャパムとの連携も日に日に向上しており、それと比例して敬語で話す事も無くなった。

場所は変わり、季節が変わり、いつの間にか旅立ちから一年が経とうとしていた……。

~~~~~

「ダメだ、剣が通じねえ！どこ狙っても弾き返されちまう！」

足の関節の隙間を狙って攻撃をしかけていたチャパムが悔しげに言った。

今、俺達の目の前には黒と茶の斑模様を持った巨大で不気味な蜘蛛がいる。

……魔獣王だ。

気味の悪い赤茶の複眼に俺達の姿を映しながら、ヤツは驚異的なスピードで住処である森の中を音も無く移動しつつ襲いかかって来る。

死角から放たれる毒液や前足での突き刺しを避けるだけで一苦勞

だと言うのに、戦闘のさなかでも産み出され続ける魔獣たちがとにかく鬱陶しく邪魔臭い。今の俺にとってただの魔獣は十数秒で倒せる雑魚だが、それでも魔獣王と同時に相手をしなければならぬ状況では非情に厄介な障害物へと変わる。

死角を減らすため、チャパムと背中合わせに剣を構えながら愚痴を吐いた。

「くそっ、せめて魔獣たちの足止めが出来れば……！」

「なんだ、拓斗！あのデカブツを倒す策があるってのか？」

「博打みたいなもので良ければな！」

「どうせ、他に打つ手もねえし！このまま無駄死にするよりマシだろ！言ってみろ！」

猛然と襲いかかって来る魔獣を蹴散らしながらの会話は自然と叫ぶような形になる。

魔獣王は現在、森の中に身を潜ませて俺達の隙を虎視眈々と狙っている状態だ。

あの巨体で一体どうやってとは思うが、要は腐っても蜘蛛という事なのだろう。

「外側は固くても、内側までそうとは限らないだろ！？」

「……ったって、どーすんだよ！口の中に飛び込むってんなら完全に自殺行為だぞ！」

「俺の能力で、ヤツの体内をインスタント麺でいっぱいにするんだ！それこそ内臓が破裂するぐらいにな！」

「お前がアレを出せるのは見える場所だけじゃなかったか！？」

「だから博打だって言ってる！」

ぶつつけ本番だから上手く行くかどうか分からないし、そもそも中身も強固だったら麺じゃどうにもならない！

その前に、魔獣をどうにかしないと能力を発動する隙が……チャパム右っ！」

「だあっ！…つぶねえ！」

木々の隙間から魔獣王の毒液が弾丸のように飛んで来るのをギリギリかわして、再び魔獣を掃討していく。

軌道を追ったところで、すでに場所移動されているのは現在までの経験で分かっていた。

「とにかく、コイツらがお前に寄らないようにすりゃあイイんだよな！？」

「でも、それが出来たら苦労はしないってヤツだ！数が多すぎる！」

「なあに、話は簡単だ！狂乱丸を使えばいい！」

「きよっ！って、まさかチャパム！あんた一人で囦になる気か！？死ぬぞ！？」

「はん！始末屋チャパムの実力をなめんじゃねえよ！

それとも他にもっと良い案があるってのか！？迷ってる内に二人とも死んだら阿呆だぞ！」

「くっ……分かった。チャパム、雑魚は頼む！」

「おうっ、任されたぜ！」

そう言って、俺から離れて行くチャパムを熱湯を降らせることで援護しつつ、自分自身の身も戦い守る。

やがて、彼の消えた先で紫色の煙が上がり、魔獣全てが盲目的にそちらへ向かっていくのを確認した後、俺はそこから少し離れた位

置に立ち止まり剣を持った腕をだらりと下げた。

すると、その行動を隙と見たのか動かない俺の側面から魔獣王の突き刺し攻撃が鋭く迫る。

それを懸命に避けながら森からはみ出していたヤツの顔面を視界に捉えた。

「っ喰らいやがれえええええええええッッ！」

魔獣王の頭の中に大量のインスタント麺を投入する。

この場から見えないので成功しているのか否か分からないが、とにかく出し続ける。

それから五秒ほど経った頃、一瞬ピタリと動きを止めた魔獣王は、次に狂ったように暴れ出した。

統率のとれていない足で木々をなぎ倒し、毒液を無闇矢鱈に吐き散らす。そこに自らの産んだ魔獣がいようともお構いなしだ。

……イケる…のか？

暴走する魔獣王からダッシュで距離を取り身体全体を視界に収めた俺は、ヤツの胃と言わず脳と言わず体中のありとあらゆる場所に麺を出現させていった。

どれぐらいの時間、それが続けていたのかはよく分からない。

ほんの五分程度だったような気もするし、一時間くらいそうしていたような気もする。

急に魔獣王の動きがゆっくりになったと思ったら、身体全体をブルブルと震わせ出した。

そして、ヤツは口や目やその他ありとあらゆる穴から麺を飛び出させながら引っくり返り、数度の痙攣の後、絶命した。



勝った、と勝利の余韻に浸る暇もなく、既視感のある白い光が俺の身体を包む。

「この光っ、もしかして召喚の!？」

「どうやら上手くやったみてえだな!」

魔獣王は麺の攻撃に苦しみ出してから一切魔獣を産みださなくなっていた。

だからだろう。明らかに数が少なくなっている魔獣の群れと交戦しながら、チャパムが俺の元へとやって来た。

さすがに親玉の魔獣王が死んだからといって、ゲームのように生み出された手下も同時消滅といった具合にはいかないらしい。

俺はそんな彼にありったけの感謝の気持ちを込めて叫び返す。ついでに最後の援護とばかりに魔獣に熱湯をかけてやった。

「ありがとう! 何もかもチャパムのおかげだ! 恩、返せないけど、ごめんっ!」

「恩も何もねえ、お前は魔獣王を倒してこの世界を救ったんだ!」

胸を張りやがれ、拓斗! いや……救世主・拓斗!

………っ達者でな!」

チャパムのその言葉が耳に届いたと同時に、俺、井上拓斗はこの世界から永遠に姿を消した。

~~~~~

こうして、魔獣王討伐を見事に果たした俺は日本へと帰還した。すでに他の住人が入っていたアパートに戻ったおかげで不法侵入扱いされたり、神隠しの青年奇跡の生還などと無駄にニュースになったり、そのおかげでタチの悪い嫌がらせを受けたり、無断欠勤で当然のごとく無職になっていたり、それはそれはショッキングな出来事に連続で見舞われながらも、あちらの世界で鍛えられた不屈の精神力でもって何とか平穏を取り戻した。

それから数年後。とある町の小さな飲食店街の一角にこれまた小さな店を構えた俺。

素人が何を商売などと思うだろうが、今日も今日とて二十畳程度の狭い店内は客で溢れかえっている。

「マスター、注文ー。ボン兵衛、硬麺ー。」

「こっちはうまかとばい大盛り、トッピングにワカメとコーン。」

「特製ドッキング麺の八平ちゃん&UHOをマヨだくで。」

「あいよーっ！」

向こうの世界で神ラームに授けられた能力は地球帰還後も失われず、どうせならと有効活用させてもらう事にしたのだ。

少しばかり奥まった場所にあるため始めた当初は閑古鳥が鳴いて

いたものだが、段々と口コミで評判が広がっていき、今では盛況に次ぐ盛況で休む暇も無い。

全国各地を巡りご当地もののカップ麺等も網羅した俺は、目下インスタント飯屋として奮闘中だ。

「ねえ、マスター。ちょっと質問。」

「おー、何だ？」

「前から気になってたんだけど、このお店の名前ってどういう意味なの？どっかの外国語？」

「いや……。」

昔、俺のふるまうインスタント麺を誰より喜んで食べてくれた奴がいてな。」

もう絶対に会えない場所にいるんだけど、それでもいつかまた食べさせてやりたくて…。

勝手だとは思ったけど、そいつの名前を貰ったんだよ。…『チャパム』……ってな。

インスタント・メシア奮闘記 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6778y/>

インスタント・メシア奮闘記

2011年11月25日18時55分発行